

戦国文化にみる“生涯学習と学習観”

“Lifelong Learning Studies” from the Viewpoint of Sengoku Era Culture

次世代教育学部学級経営学科

荒井 魏

ARAI, Takashi

Department of Classroom Management

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：生涯学習の理論・哲学的弱さ、戦国の熱い“生涯学習”意欲、謙虚な学び精神、新たな生涯学習の形成

Abstract : About 40 years has passed since Lifelong Learning Studies was first proposed at UNESCO by matured education committee of UNESCO. However in Japan, Lifelong Learning Studies has faced difficulty particularly due to the recent economic problems. It has often been said that the basic activity of Lifelong Learning Studies in Japan is theoretically and philosophically weak. To overcome the present difficult situation, we must make effort to produce a rich theory and philosophy for Lifelong Learning Studies which recognizes the culture and tradition of Japan. For this purpose, I tried to investigate the tradition of the Sengoku Era (The Warring States period) which had introduced the roots of present Japanese culture. I discovered energetic wills of “lifelong Learning” among people, particularly superior Samurai. Tea ceremony culture which contains modest spirit and manner of study was born in this period. From studying tradition of the Sengoku Era, I propose various values which may help to form a new theory and philosophy of Lifelong Learning Studies for our future.

Keywords : Theoretically and philosophically weakness, Energetic wills of “lifelong Learning,” Modest spirit of study, To form a new Lifelong Learning Studies,

はじめに

最初に本論文の意義について述べたい。それには、まず生涯学習（生涯教育とほぼ同義語に扱われる場合が多いが、厳密には学習側に重点を置いた表現）とは本来どのような経緯で生まれたのか、その今日的な意味を再検証するとともに、「今日性」を維持するためには、どのようなことが生涯学習に求められているのか、私見を含めて考えてみたい。その関わりの中から、本論文の意義を理解していただければと思う。

生涯教育・生涯学習の歴史を概観すれば、1965年にバリのユネスコ本部で開催された成人教育推進委員会で、「生涯教育について」との議題で会議（議長はポール・ラングラン）が開催され、一躍脚光を浴びたところから始まっている。会議の成果はユネスコの事務局長に提出された「ワーキングペーパー」などにまとめられた。日本では当初、社会教育の一環として受け止められ、ワーキングペーパーは「社会教育の新しい動

向」という表題で翻訳され、ユネスコ国内委員会から刊行されている。

以後、多くの国で生涯学習（以下、煩雑さを避けるために生涯教育の意味を含めた表現として「生涯学習」に統一）論議が起き、日本も積極的に導入をはかった。1987年には生涯学習体系へ移行をはかることを教育改革の基本的視点の一つにすえるべき、との臨時教育審議会の最終答申が出され、翌88年には、文部省の社会教育局が改組されて生涯学習局が設置された。

こうした生涯学習社会づくりに向けた国際的な潮流は、第一には戦後の相次ぐ技術革新による社会構造の絶え間ない変化にさらされている中で、常に新しい知識、技術などの習得が人々に求められていること。二つ目には余暇時間が増大する社会において、人々が物質的豊かさだけでなく精神的な豊かさ、自己実現、人生のクォリティーを追求し始めたこと。第三に登校拒否をはじめとしてさまざまな問題が起きている学校教育における新しい教育原理としての期待—などから人々に受け入れられ、生まれた。¹⁾

未成熟な日本の生涯学習社会の問題点

しかし約40年の歴史的変遷を経て、日本における生涯学習社会が順調に発展しているかといえば、疑問が多いのではないか。

日本では欧米と異なり、学びの対象をレジャー、遊びに近いものであれ、何であれ受け入れ「何でも生涯学習」といった日本型生涯学習を展開してきた。一方、教育関係者の間では何よりも新しい教育原理としての期待を寄せる声が多く、他方産業界などでは、技術革新社会における新しい知識、技術などの習得といった問題に関心が傾きがちで、体系的な生涯学習の理論形成がすすまず、むしろばらばらだった、との観が深い。

しかも追い打ちをかけたのが、バブルがはじけて以後の景気回復最優先の時代的影響をもちに受けたことである。行政の後押しも弱まり、今後どのような展望を開いたらいいのか、五里霧中とも言える状況なのではないか。裏返して言えば、日本の生涯学習社会の未成熟ぶりが露呈したとも言える。

では、未成熟な日本の生涯学習社会の背景はどこにあるのであろうか。何よりも大きな理由は、体系的な生涯学習の理論形成のベースとなるべき理念、哲学が十分にはぐくまれてこなかった点にあるのではないかと考える。特に精神的な豊かさ、自己実現、人生のクオリティー追求といった生涯学習出発時の受け入れに際しての、もう一つの大きな柱、というより生涯学習理念として最大の柱となりうる価値観が、きちんと位置付けられてこなかったことによるのではないかと、この思いを深くしている。

個人の人生のクオリティー追求は、個人の自己実現だけでなく社会のクオリティー実現にもつながるテーマである。個人の人間としての尊重、幸福追求権が立法や国政上「最大の尊重を必要とする」と憲法上の保障規定から鑑みても、景気によって左右されるような軽い問題ではない。にもかかわらず、生涯学習にここまで影響が出ている現状を考えると、生涯学習を推進する側にも、その点で認識が浅かったのではないかと、この思いがしてならない。あるいは文化観そのものが浅いという表現もできるであろう。

日本文化史上の「偉観」とも言うべき戦国時代

その点、欧米は違った生涯学習の文化伝統、背景を有している。1789年のフランス革命の理論的指導者、Mコンドルセは生涯にわたる教育の必要性を説いた教育法案を革命議会で提出した。諸般の事情で、幻の教育法に終わったが、人権としての「生涯学習権」を提起したことは、生涯学習の文化的基盤として大きな意味をもつ。²⁾

戦後もフランスの社会学者、Jデュマズディエは、ユネスコの成人教育推進委員会で生涯学習が提唱される3年前に、著書「余暇文明へ向かって」(1962)で生涯学習の重要性を主張した。デュマズディエは、大戦中ナチへの地下抵抗組織活動から市民生活に戻った体験がある。その体験に基づき、個人の自己実現につながる平和で実り豊かな文明創造としてレジャー時間を生かした生涯学習を主唱したところに、言葉の重みを感じられる。

しかし日本では、生涯学習の上面だけで、理想的には歴史的背景を含めどこまで理解されて導入されたのか、疑問が多い。戦争体験もデュマズディエの主唱するような、物質文化よりも精神文化にシフトするといった文化的風土を生むきっかけとはならなかった。一方、日本の学びの文化伝統は敗戦による戦前否定と重なり、切り捨てられてきた部分が多いように思う。「何でも生涯学習」といった日本型生涯学習も決して悪くはないのだが、その底の浅さも、そうした背景から生まれているのではないかと。

本論文で、改めて日本文化の中の学び文化に焦点を当てたのは、安易に切り捨てられてきたが、そこに本来の日本人らしい自己実現、人生のクオリティー追求の形があったのではないかと。それを明らかにすることは、日本の生涯学習をもっと地に足の着いたものとし、本来の意味の「日本型生涯学習」づくりのヒントともなるのではないかと、考えたからである。

概念的には「古典的生涯学習(教育)論」の範疇に入るであろうが、日本の学び文化も古代以来、素晴らしい伝統を誇る。その中で、あえて「戦国文化」にこだわったのは、訳がある。戦国時代と言えば、普通は動乱、荒涼とした時代風景を思い浮かべることが多い。文化的にも不毛の時代と思われがちである。

しかし、それは大きな誤解なのだ。茶道、能、書院造りなどの建築にしても、多くが室町中期から安土桃山期にかけてのこの時代に生まれ、あるいは育まれ、

今日の私たちの文化の直接的なルーツとしてつながっているのである。平和な時代に文化が育まれるのは、当然であろうが戦乱の時代に、豊かな文化が生まれたというのはある意味、日本文化史上の「偉観」とも言えるに違いない。

さらに興味深いのは、この時代の人々は前後の時代に比べ自我意識が強く、独特の活力をもった一種の強烈な生涯学習精神があったことだ。それは、この時代の文化的豊かさとどうつながっているのか。やはり自我意識の強い現代の生涯学習社会の発展が、どこまで新しい時代の文化創造に寄与できるのかという問題との関わりでも、多くのヒントを与えてくれそうな思いがしたのである。なお戦国時代は、1467年からの応仁の乱が始まりとされるが、終わりをいつとするか諸説ある。ここでは関が原の戦いまでの戦乱の続いた激動の時代として、その文化を論じたい。

“生涯学習”の担い手の代表は武将たち

この時代の強烈な“生涯学習”意欲の担い手の代表は戦国武将・武人たちである。権謀術策に明け暮れていたと思われがちだが、有能な武将・武人として知られている人物ほど生涯にわたる学びの意欲を強くもち続けた。教育的訓話「三本の矢」伝説で知られる毛利元就、川中島の決戦で知られる武田信玄、上杉謙信らは詩歌にいそしんだことで知られ、元就の場合は歌集「春霞集」も残し、信玄も山梨県若草町の法善寺に奉納された「武田晴信（信玄）朝臣百首和歌」など和歌、漢詩に優れた作品が多い。

戦国時代中期の教養、学びの代表は連歌も含め詩歌であったが、和歌世界一つにしても学びの努力が大変だったはずである。歌枕ひとつとっても、さまざまに学びが求められ、たとえば元就の涙ぐましい努力ぶりは、「源氏物語」の愛読逸話や残された「続古今和歌集」や「徒然草」などの写本がよく伝えている。³⁾

戦国末期に相次いで天下人となった織田信長、豊臣秀吉、徳川家康らも学びの精神を生涯、失わなかった。信長は茶道に親しんだこと、また鋭い美術眼を育んだことでも知られる。それはキリスト教の伝道士らを相手にした信長の熱心な西欧文化への好奇心、学びの成果と結び付いて、絢爛たる安土桃山文化を導き出した。おそらく信長の存在がなければ、豪壮な近世城郭建築も信長の庇護を受けた狩野永徳らに代表される金箔画などの豪宕華麗な絵画世界も簡単には出現しなかったに違いない。

信長の後を継いだ秀吉も学び熱心であった。一般に成り上がり者で教養とは無縁に思われがちだが、能、茶の湯、和歌などに励み、特に能、茶の湯は、玄人はだしであった。しかも学びを人にすすめることにも熱心で、伏見城を築城した際には学問所を設けた。その四方に数寄屋が建てられ、いずれの数寄屋にも秀吉自筆の和歌短冊がかけられてあった。この学問所で、諸大名たちは茶道や和歌などの秀吉の学びに付き合わされた。

現代の生涯学習センターとも通じそうな面もある学問所だが、秀吉には天下人として到来した“平和の時代”にふさわしい教養を、諸大名たちに身につけさせるとの狙いもあったのであろう。付き合された大名の一人、佐竹義宣は「この分では自分は、関東一の数寄者（風流人）であるかもしれない」といったぼやきに近い書状を家臣に送っている。

家康の場合は能、和歌、茶の湯、香などを熱心にたしなむ一方で特筆すべきは、儒学、仏教の学びに熱心であったことである。その熱意は晩年に、「孔子家語」などの木活字本、「群書治要」（一種の政治学書）や「大蔵経」（仏教の経典を網羅）などの銅活字本の出版となって実を結んだ。

このような武将・武人たちの“生涯学習”ぶりを軽視できないのは、時代のリーダーであっただけに現代につながる日本文化において大きな影響を及ぼしていることだ。

人生の「クオリティー」への希求

この他、三条西実枝から「古今伝授」を受けた細川幽斎、「独眼竜」などの異名で知られる伊達政宗…ら武略だけでなく教養人として知られる戦国武将は多い。問題は動乱の時代に、その熱心な学びぶりがどうして生まれ、持続されたのかである。この問いかけは、経済の風むき一つでつまづいてしまう現代の生涯学習と比べる時、示唆深いものがあるのではないかと。答えとして、しばしば見受けられるのが、家臣や領民に君臨するための文化的権威づけとの見方である。確かに、そのような見方も一面では可能であろう。しかし、それだけでは戦国武将を権力者としてとらえているだけであって、肝心な面が抜けている。「人間」としての戦国武将である。

一人の「人間」として戦国武将を捉えなおせば、改めて浮かび上がってくることもある。当時はリーダーである武将でさえ家臣同様、明日の命は知れぬ時代であった。そのことは天下人であった信長でさえ、本能

寺の変であえなく果てたことがよい例である。そうした時代において、武将も「生」の在り方に鈍感でいられるわけもなかった。また、そういった見方がなければ、一杯の茶を喫して戦場に出かけ、無事に帰陣した時に再び茶を喫する武人の心象風景は本当には理解できないに違いない。

武将たちの単に熱心であるだけでなく真摯さのある学びぶり。それも生と死の狭間で、どう生きるべきか、さらには人生のクオリティーを求めた思いと理解すると、よりわかりやすい。もともと無教養な秀吉が、茶の湯、能などを極めたのも、そうした人間的解釈がなければ成立しないであろう。

「花も実もある人生を」という武田信玄の生涯学習観

学びに人生のクオリティーを求めた戦国武将の思いを伝える逸話、事例は実はかなり多いのだが、その中で代表的なケースとして、また後世に大きな影響を与えた意味でも興味深いのが、武田信玄であり、その生涯学習観である。

信玄は武勇に優れた戦国武将の典型的なイメージがあるが、前述したように詩歌に熱心にいそしんだ武将であった。それも根っからの文人タイプだった。幼い頃は乗馬、水泳などの個人的な武技はあまり得意でなく、しかも青年期に文学にあまりに熱中したため、父親の信虎から軟弱な息子として落ちこぼれ扱いをされたほどである。後に信玄が父信虎と対立、遂に駿河に父を追放するという事件の伏線も、一つにはここにあった。

学びの真剣さは、領国の甲斐（山梨県）にある恵林寺の住職に惟高妙安、策彦周良、快川紹喜ら当時都で知られた有数な知識人の傑僧を次々と招いたことから想像できる。このうち快川紹喜とは、師弟の関係であると同時に文学を語り合う友といった関係にも近く、詩歌を通じてのさまざまな逸話も残されている。信玄死後の武田家滅亡時、快川紹喜は織田信長に抵抗し「心頭滅却すれば火自（おの）ずから涼し」との有名な偈を残し、火中で死ぬが、それも信玄に殉ずる気持があったのであろう。

信玄の学びへの思い入れが尋常でなかったことをもつともよくうかがわせるのは、「甲陽軍鑑」に伝えられる病で亡くなる前の言葉である。そこで信玄は一刻も早く都に上洛したいとの希望を語り、上洛後、天皇に拝謁するという公式行事の次に真っ先にしたいこととして公家たちとの歌会、五山の僧たちとの詩のやりとりをあげている。さらに、それが実現したら翌年死んで

もいい、「是信玄が念願也」とさえ語っている。

単に学びが文化的権威づけであったというような解釈が、いかに無理があるか、信玄の一生がよく物語っているのではないか。その信玄はまた歌道に託しての一種の生涯学習観を次のように語っている（甲陽軍鑑）。

「侍は歌道たしなみ可申事肝要也。歌道ニてハ諸道をしる。大身小身共に歌・連歌たしなみ候へバ、また文道へも、をのづから心ぎす者也。歌道・文道へたづさハリ、へたにもうたをよみ詩を作ルハ、武士大小共ニ、武道のきよめ也。いかに武辺あり共、右ニ道無案内なるハ、木に枝葉ノなく、花さかずしてみならざるごとし」⁴⁾

大身の武士も小身の武士も歌をたしなむことは大事であり、歌道を学べば自然と他の学びの世界もわかるし、学問にも関心が向くようになる。歌道や学問に通じ、下手でも詩歌を作るのは武士の身分の大小にかかわらず生き方を美しいものにしてくれる。逆にいかに武技に優れていても、学びの道に縁のない者は木に枝葉がなく花が咲かないようなものだ、というのである。要訳すれば、「花も実もある」という人生のクオリティーのために、学びが必要だという主張と理解してよいであろう。

江戸期の武士道にも影響を与えた信玄

信玄という人物がいかに一流であったかということ、こうした言葉からよくうかがえると思う。「甲陽軍鑑」に記されたこの学習観は、弟の武田信繁が信玄の考え方をバックに作ったとされる99カ条の「武田信繁家訓」（「信玄家法」とも呼ばれる）にも収められた。第11条の「学文、油断スベカラザル事」、第12条の「歌道嗜ムベキ事」など武士の教養を説いた条項である。⁵⁾

しかし、それだけではなく、さらに後世に影響を与えた節がうかがえるのだ。元和元（1615）年、徳川家康が僧の崇伝らに命じて起草させ、制定された武家諸法度である。驚くことに第1条にいきなり「文武弓馬の道、専ら相嗜むべき事」として「文を左に武を右にするは、古の法なり、兼ね備えざるべからず…」と述べられている。

つまり文武両道、花も実もあってこそ武士という規定である。家康が生涯で誰よりも尊敬したのは、自分以前の天下人であった信長でも秀吉でもなく、信玄であり、その遺族、旧家臣たちを大事に扱ったことはよく知られている。その家康が武家諸法度制定時に「信

玄家法」とも呼ばれる「武田信繁家訓」や信玄の考え方を旧家臣たちから聞いて参考にしたというのは、ごく当然の話であろう。

江戸時代に純粹培養された形で成立してゆく武士道の起源にいろいろな見方があるが、その一つに武家諸法度の第1条があることは間違いない。古い文化として片付けられてしまいがちな武士道だが、戦前の日本に本来の武士道が生きていたら、文を軽視して武力ばかりに走り、他国文化を平気で圧殺するような愚を仕出かすこともなかったに違いない。その一方で案外若い人でも「文武両道」という言葉を口にする。戦国期の学び文化が気付かない形で今も生きているということも、また事実なのである。

「道の文化」としての茶道

戦国文化の学び観を探る上で、もう一つ見落とせないのが、茶道、香道、華道など「道」の名の付く学び文化のほとんどが、この時代にルーツをもっていることである。その代表である茶道の成立に焦点を当てて、「道の文化」とはどのような学び文化なのかを明らかにしたいと思う。

茶道とは、つまりそれ以前のもてなし・寄り合いといった遊興性の高い茶とは異なる精神性の高いわび茶世界のことだが、その成立で興味深いのは、多様な文化が混ざり合って誕生していることである。

担い手は堺の町人衆に始まり、やがて武家社会に次第に受け入れられて行った。担い手からみれば、町人文化と武家文化が混ざり合っている。さらに禅文化、加えてキリスト教文化の影響もみられるとの説もある。

しかし何よりも茶道のベースとなったのは、禅文化であった。それは茶道の祖とされる15世紀の茶人珠光は、臨濟宗の京・大徳寺末寺の住職であった一休禪師の弟子であり、「わび茶」を16世紀後半に大成した千利休も熱心に大徳寺に参禅し、「利休」の名も居士号であったことから明らかである。

禅との深い関わりは利休の茶道観を伝える各種の記録もよく伝えている。利休の茶道秘伝を弟子が記録したとされる『南方録』第一巻は、次のような話で始まっている。茶の心を深めるには小座敷がいい、と利休が常日頃語っている訳を弟子に問われ、利休は「小座敷の茶の湯は、第一仏法を以て修行得道する事也」と答え、立派な建物や食事の珍味を茶の湯の楽しみとするのは俗世間のことで、「家ほもらぬほど、食事は飢ぬほどにてたる事也、是仏の教、茶の湯の本意也、水を運

び、薪をとり、湯をわかし、茶をたて、仏にそなへ、人にもほどこし、吾ものむ、花をたて香をたく、ミな／＼仏祖の行ひのあとを学ぶ也」と言ったというのである。⁶⁾

利休の茶道にみる人生修業としての学び観

では茶道のベースとして、このように禅文化が受け入れられた訳は何であろうか。それは、当時の時代状況と重ね合わせて考えてみる必要がある。下剋上社会でもあった戦国時代は、善かれ悪しかれ、個人の自我意識が膨張した時代であった。人は傲慢、刹那的な快楽に走りやすく、初めての南蛮・異国文化との出会いもあって、文化的にも価値観の混迷があった。それだけに秩序、和が求められる時代でもあった。

精神性の高い茶の湯、茶道が誕生したのは、こうした時代状況と切り離せない。もし秩序、和の精神が求められるとすれば、それは人間の傲慢さを戒めるに足る絶対的な秩序、存在でなければならない。茶道においての絶対的秩序は仏の存在であり、そこへの“案内役”として禅が用いられたのは、禅のもつ合理的な精神が時代精神とマッチしていたためではないか、と考えられる。

そのことを裏付けるのは、茶道世界にあっては、茶室の床の間は仏の存在を象徴することだ。ただし禅宗では偶像を無視する関係上、名僧の墨跡などをかけ、茶室内では仏に献茶するような、つつまじやかな気持ちで客に対する。つまり墨跡であっても、茶室はまごうことなき仏の存在する場なのである。⁷⁾

利休が茶道を「第一仏法を以て修行得道する事也」、「ミな／＼仏祖の行ひのあとを学ぶ也」と語ったというのも、そのためだが、そこからは人間とは本来傲慢になりやすい命であり、絶えず人生修業が必要だとの考え方。茶の湯の学びは、人生修業そのものだという思いがくみとれる。

「世の中に茶をのむ人はおほけれど、みち（道）をしらぬはちやにぞのまる」といった利休の戒めの歌もあるが、利休に私淑した茶人でもある伊達政宗の言行録「木村宇右衛門覚書」にも、利休の茶道観、考え方がよく伝えられている。

そこで政宗は千利休らの本来の茶の湯は、最近の寄合いとあまり変わらない茶と違い、普段うち寛（くつろ）いだ関係でも「物ことつゝし（慎）みうやま（敬）ひ、さほうたゝ敷……」ことで、「親しき中もきつとあらた（改）めんため也」と述べている。⁸⁾

「道」とは茶道に限らず華道、香道などにしても人の生き方、人生そのものを指しているが、日本的な「道の文化」のベースは、いずれも生き方と重ねた学び、成長という利休の考え方に沿っている。

和敬清寂の精神

では生き方と重ねた学び、人生修業によって利休が茶の湯に求めたものは何であったのだろうか。茶道精神はしばしば「和敬清寂」と評されるが、利休が求めたものを、その言葉はよく代弁している。

「和」は人同士の和であり、人と自然との和した関係でもある。争いと違い、和が生み出す人間社会における秩序、自然世界との連帯感、そこに育まれる文化的創造性を利休は意識していたに違いない。「敬」は和の心のベースであり、神仏、自然、人への敬いでもあり、傲慢さを捨てた謙虚な精神とも言える。

「清」は、「和敬」の精神から育み出される心の清々しさであり、一つの美意識とも言える。「寂」は、そうした精神をベースとした心の静かさ、深さの境地とも言えると思う。

利休をめぐる逸話、茶会は「和敬清寂」精神をそのまま物語っている。利休によって定着させられた茶の湯のまわし飲みは、「和」の精神から生まれているであろう。『山上宗二記』には、利休の話として日常の茶でも「路地へ入ヨリ出ルマデー一期ニ一度ノ會ノヤウニ、亭主可敬畏 世間雑談無用也」とし、「茶ノ建（點）前ハ無言」と記している。この話にも「和敬清寂」精神が、にじみ出ているのではないかと。

利休の茶を評するに「雪の日に花はなし」との言葉がある。寒い雪の日の茶会で床の間に花を生ける必要はない、雪もまた「花」なのだといった美意識が利休の茶道世界だということであろう。自然に対し謙虚な「和敬清寂」の境地から紡ぎ出された「清」、清々しさ、しかもその強烈な美の意識の主張が、生き方と重なっていることが改めて注目される。

当時の寄り合い的な色彩が濃かった茶会の酒宴をカット、一汁三菜以下に抑えた質素な料理を基本とした茶の湯に切り替え、そこを謙譲な精神を養う人生修養の場とし、その学びの姿勢そのものに生き方の美があると考えていた利休。その思想が本物であったことは、生き方ばかりでなく死の鮮烈さが物語っている。

いわゆる「利休切腹事件」である。事件背景には謎も多いが、天下人の豊臣秀吉も通る京の大徳寺山門上に、山門修復の寄付をした利休の立ち姿の木像が安置

されたことが、秀吉への不敬とされたのが原因とされている。

利休が罪に問われたと知って、さまざまに救済の手が伸ばされた。加賀百万石の祖、前田利家は「秀吉の母の大政所と正室、北政所を通じてわびれば許されるだろう」との助命運動を申し出た。ところが利休は、この助命運動を「天下に名を知られた利休が、婦人を頼んでわびて、命乞いなど、たとえ処刑されてもできない」と断っているのである。

しかし事実は、茶道を人生修業の学び世界に高め、「和敬清寂」という謙虚な生き方をベースとした精神世界を築き上げた利休にしてみれば、最高権力者として傲慢な姿勢でその世界に土足で踏み込んでくる秀吉が許せなかったのではないかと、この思いがする。

文化史上の事件として総括すれば、死をもって権力者にも屈しない姿勢で、利休は茶道を完成させたとも言える。茶道に限らず、「道」の名の付く日本文化が、権力者にとっても敬意を表すべき「学びの世界」として確立、認知されたのも、この事件の影響が大きいのではないかと考える。

戦国の学び文化の今日性

戦国文化にみる学びぶりとその学習観について検証してきたが、最後に本来の意味の地に足の着いた「日本型生涯学習」の理論体系、理念づくりに資する目的で、その今日的意味を考えてみたい。近世、近代を飛び越え何故、戦国の学び文化なのかという疑問もあるかもしれないが、ある意味、現代日本と非常に通じるものがあり、その意味でも示唆深いものがあるのではないかと、思うからだ。

すでに述べたが、まず自我の意識が共に強い時代である。いずれも文化的に外に開かれた時代で多文化状況の中にあつた。時代的には戦国は中世から近世への転換期、現代もまたポスト工業化社会、ポストモダン、ポストポストモダンとも言われる変革期の渦中にある。

戦国の戦乱の時代と異なり、現代は平和な時代であるように見受けられるが、グローバリズム化によって世界の一体感が高まる中で、テロ、戦争、さらには地球環境の問題など同じく強い不安材料を抱えている。同時に物質的豊かさをもたらす幸福感の限界も見え、戦乱の時代と同様に現代も生き方の模索の時代である。そのため学びの在り方、生涯学習のテーマも大きく浮上しているわけであり、似通った背景がうかがえるのだ。

そうした観点も踏まえて再検証すれば、一つには戦

国武将・武人らに代表される、戦乱の時代であるがゆえに自己実現、「花も実もある」人生のクォリティーを求めた真摯な学び精神である。それが現代につながる文化の創造性のあまり知られざる源になっていたことを考えると、非常に示唆深く感じられる。

生涯学習の柱として、技術革新の時代の知識、技術習得も大切であり、学校教育における新しい教育原理としての見方も大きな意味をもつが、何かのための生涯学習ではなく自己実現という目的そのものである生涯学習こそがもっとも大きな柱となりうるエネルギーをもち、新しい文化創造に役立つのではないかと、いうことである。他国はどうであれ、日本人、日本型生涯学習にはその方がふさわしいのではなからうか。

第二に、生き方の美しさに芸術美を追求し、茶道を人生修業、修養の学びの場とした利休に代表される「道」の文化の学び伝統である。それは江戸期に入り家元制度などによって形骸化するが、利休らの原点に戻れば、さまざまに示唆を与えてくれる。

傲慢さに対し、生き方のつつましさを、謙虚さを。欲望に対しては無欲を。モラルが荒廃した戦国の風潮とまさに対照的だった価値観を主張した利休の茶について『キリシタンと茶道』の著者、西村貞は「これ（わび茶）はその時代の趨勢とは全く逆行する精神現象といふものである」とし、「甚だ意味ぶかいことと言はざるを得ない」と述べている。⁹⁾

現代もまたさまざまにモラルの荒廃した時代である。欧米文化の行きすぎは個人主義の悪しき面での自己肥大をもたらし、無制限な自然開発などといった地球環境の問題につながる人間の傲慢さの問題を再提起している。

それに対し茶道などの日本の伝統文化思想には、現代の課題に答えられる普遍的な学びの哲学が内包されているのである。そうした学びの哲学、風土を生かすできれば、世界に誇れる新しい「日本型生涯学習」を創造できるのではないかと、との思いを深くしている。

引用文献

- 1) 日本生涯学習学会編 (1990) 「生涯学習事典」東京書籍pp.19
- 2) 日本生涯学習学会編 (1990) 「生涯学習事典」東京書籍pp.18
- 3) 渡辺世祐監修 (1983) 「毛利元就脚伝」マツノ書店、pp.669
- 4) なかざわ・しんきち著 (1991) 「武田信玄の王朝文化撰取」武田氏研究会・「武田氏研究」8号、pp.45

(「甲陽軍鑑」には「信玄公御出言」として記載されているが、その解説を含め)

- 5) 酒井憲二編著 (1994) 「甲陽軍鑑大成第一巻本文篇上」汲古書院、pp.44
- 6) 熊倉功夫編著 (1983) 「南方録を読む」淡交社、pp.9-12
- 7) 桑田忠親著 (1957) 「乱世と茶道」平凡社、pp.10-11
- 8) 小井川百合子編 (1977) 「伊達政宗言行録——木村宇右衛門覚書」新人物往来社、pp.84-85
- 9) 西村 貞著 (1948) 「キリシタンと茶道」全国書房、pp.5-6

参考文献

- 荒井 魏著「花一路」毎日新聞社、2000
荒井 魏著「天下人の自由時間」文芸春秋社、2003
小井川百合子編「伊達政宗言行録——木村宇右衛門覚書」新人物往来社、1977
熊倉功夫編著「南方録を読む」淡交社、1983
熊倉功夫著「茶の湯の歴史」朝日新聞社、1990
桑田忠親著「武将と茶道」一条書房、1943
桑田忠親著「乱世と茶道」平凡社、1957
桑田忠親著「桑田忠親著作集・第3-6巻」秋田書店、1979
西村 貞著「キリシタンと茶道」全国書房、1948
米原正義編「千利休のすべて」新人物往来社、1995

(平成19年11月28日受理)